



The Raute Community and the Challenges to Maintain their Indigenous Ecological Knowledge and Practice

著者	Banu Yasin
発行年	2017
その他のタイトル	ラウテ民族のコミュニティと先住民族の知識と活動を維持するための挑戦
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2016
報告番号	12102甲第8181号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00148015

氏名	Banu Yasin		
学位の種類	博 士（環 境 学）		
学位記番号	博 甲 第 8181 号		
学位授与年月日	平成 29年 3月 24日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	生命環境科学研究科		
学位論文題目	The Raute Community and the Challenges to Maintain their Indigenous Ecological Knowledge and Practice (ラウテ民族のコミュニティと先住民族の知識と活動を維持するための挑戦)		
主査	筑波大学准教授	Ph.D.	松井 健一
副査	筑波大学准教授	博士（理学）	廣田 充
副査	筑波大学准教授	工学博士	雷 中方
副査	筑波大学准教授	工学博士	Yabar Helmut

論 文 の 要 旨

本論文は、ネパール中西部で流動的な生活を送るラウテ民族の人口推移と生物多様性保全への知識について、フィールドワークに基づき考察したものである。第1章では、ラウテ民族の人口の推移が明らかにされた。この民族については、中央政府が出す統計や幾つかの先行研究の間で人口数の差が激しく、良くわかっていなかった。中央政府の統計では、1990年代に2,000数名だったとあり、近年は140名に激減したとある。しかし、著者は、社会保障を担当する地元の役場で正確な福祉対象者の名簿を入手し、フィールドワークで実証しながら、現在の人口を約160名と確認した。この数字は、これまで先行研究の人口推定が間違っていたことを示したことになる。つまり、学術論文として初めて、ラウテ民族の人口を明らかにすることができた。

第2章では、フィールドワークを通して、ラウテ民族の女性が果たしてきた経済活動への役割や、利用している動植物の種類を明らかにした。先行研究では、男性の狩猟や交易にスポットライトが主に当てられ、女性の役割が良く分からなかった。しかし、ラウテ民族の生物多様性保全に関する知識を明らかにするには、女性の役割を詳しく知ることは不可欠である。というのも、女性が主に採集活動を行ってきたため、例えば薬用植物の種類の認識や利用についての知識は女性がほぼ独占している。本論文で著者は、それをリストアップした。また、ラウテ民族が移動する条件として、男性リーダーが女性から

食用植物の利用状況や採集場所などの情報を得て判断することも分かった。また、女性は外交的には力が弱いため、女性の視点から見た森林利用の現状が外部に伝わらず、そのために政府や NGO からの支援が金銭的な支援に集中している現状を指摘した。

第3章では、ラウテ民族と他の先住民族を政策面からアプローチし、過去 100 年ほどのネパール政府の政策が与えてきた影響を明らかにした。この背景をもとに、近年の国際法の批准と憲法改正の動きを検証し、ラウテ民族の権利のあり方の見直しがされており、著者はこの部分への考察を試みた。特に、女性の声が聞きづらいラウテ民族の状況を鑑み、女性の権利をより深く理解することを提唱した。さらに、女性の声をより深く理解することは、森林の生物多様性を保全する上で、有効な知識を得ることにもつながると述べている。

生物多様性保全については、生物多様性条約の中で先住民族の権利と知識を尊重することがうたわれている。著者は、この条約をネパール国内で有効に機能させるには、女性の持つユニークな生態系維持の知識、そして薬用植物などに含まれる遺伝子の多様性に関する知識が重要であることを述べている。

第4章のラウテ民族の現状に関する部分では、近年のネパール政府による政策が、ラウテ民族をより福祉に依存する人々に変化させていることを述べている。福祉政策は、ラウテ民族一人当たり現金を支給するが、女性は受給に赴かず、男性が家族の分を受給する。それを多くの男性は、街の酒場で使い果たす。街でも、米などの食料より酒やタバコの方が安価に手に入るため、ラウテ民族の生活は一向に向上しない。他の支援では、食料を提供するが、主にラウテ民族にとって馴れ初めのない食材がほとんどである。著者は、こうした福祉政策の盲点を明らかにすることで、政策レベルの改善策を提起した。

審 査 の 要 旨

ネパールには 59 の先住民族が政府によって認識されているが、ラウテ民族はその内最も貧しい境遇にあると言われてきた。そのため、社会福祉政策の対象となり、徐々に現代社会の影響を受けつつある。しかし、先行研究ではこのユニークな民族の持つ、生物多様性に関する知識についての記述はほぼ皆無であった。そのため、著者は、この民族に 2 年越しでアプローチを試み、ようやくフィールドに入り、インタビューと参与観察を重ねた。また、ラウテ民族と近い関係にある地方政府の職員や研究者からも聞き取りや情報収集を行った。その結果、文化人類学や環境学に関する学術分野において、顕著な独自の成果を上げたものと評価される。

平成 29 年 1 月 12 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文の審査及び最終試験を行い、本論文について著者に説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員によって合格と判定された。

よって、著者は博士（環境学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものとして認める。